

登山の基本（登山のHow To）その4

地図を読む
（読図は必修）

広島県山岳連盟 事務局長 松島 宏

登山において地図を見ながら歩くことは基本中の基本です。これを実行するかしないかが自立した登山者になれるか否かの分岐点となります。地図が読めなければ誰かに連れて行ってもらうしかないので。自分が今どこにいて（現在地）、今からどこに行くのか（目的地）を常に考えるのは人間が移動するときの原則です。それに必要なものが地図です。

登山においては国土地理院発行の2万5千分の1縮尺の地形図を使います。実際の地形を高度差10mの等高線で表わし、平面図の中に立体的な地形の情報が表されています。実際の地形が2万5千分の1縮小されて紙の上に示されているのです。山で行動する時は、常に地図を見ながら自分の現在地を把握し、目的地の方向を地図で知ります。

等高線の形や密度を見れば地形が読めます。尾根、谷、ピーク、鞍部、高度、傾斜を知ることができます。地図だけでは方向がわかりません。磁石が必要です。磁石は東西南北を

教えてくれます。地図の上側が北、磁石で北を知り地図の上側に合わせて地図を正しい向きに置きます。これを「地図を正置する」と言います。地図を正置して現在地から目的地の方角を知るのです。それができれば登山道がなくても、道のない冬山でも、視界がなくなっても、今からどの方角に向かうのかがわかります。これが原則です。地図を自由に操ることができれば行動が正確に迅速にできます。

現在地がわからなくなると、目的地への方向もわからず「道に迷った！」状況となります。道に迷ってしまうと本当に混乱してしまいます。道迷いにならないように現在地を把握することが「地図を読む」ことなのです。

道に迷ったときの対処法は、現在地がわかる場所まで戻り、読図をやり直します。でも一旦迷って歩き回ってしまうと、そのわかっていた場所に戻れないことが多く、本当に困ってしまいます。





地図読みのヒント

- ① 等高線の間隔が密な場所は傾斜が急である。等高線の間隔が広い場所は傾斜がなだらかである。
- ② 等高線が丸く円を描いている場所は頂上や凸部である。そこから張り出しているカーブ状の等高線の束が尾根である。逆に頂上や凸部に向かって食い込んでいる等高線のカーブの束が谷である。等高線のカーブが向かい合っている場所は鞍部である。読図において尾根、谷、頂上がわかるようになればしめたものである。慣れてくれば地図を見れば、立体的な山の形が浮かんで見えるようになる。
- ③ 2万5千分の1の地図上の1cmは実際の地形の250mである。つまり地図上の4cmが1kmである。

登山において行動中は常に地図を持ち、現在地を把握しながら指差していくことが自立した登山者の姿なのです。それは少々めんどうくさくて煩わしいことですが、とても重要なことです。最近は登山者用のGPSが普及し車のナビのように便利になりましたが、一旦山中で電池切れになればなんの役にも立たなくなります。ですから地図と磁石を活用することはとても原始的(?)でアナログそのものなのですが、登山の基本なのです。

さあ、地図と磁石を携えて山にでかけましょう。

(まつしま ひろし)

写真は全て ネパール テンカンポチェ峰 (2005年5月)

